

青蘿と蝶夢

―師弟関係を中心に―

富田 志津子

はじめに

栗の本青蘿（「山李坊令茶」、あるいは「山李」「山里」「三李」「三里」とも。本稿では「青蘿」で統一する）の俳系について、いつ俳諧を学び、師は誰であったのか、不明な点が多い。『俳文学大辞典』（平成七年刊）「青蘿」の項では「一三歳の時、江戸で玄武坊の門に入ったという」としている（拙稿）。これは、青蘿追善集『水の月』（玉屑編、寛政三年序）の「青蘿居士終焉記」に「稚き頃より風雅に志ありて、十三歳の時東都の玄武坊が門に入」（濁点、句読点は富田による、以下同じ）とあるのに拠る。たしかに、玄武坊の名は、青蘿の第一撰集『蝸壺塚』（明和五年跋）をはじめとして、青蘿関係の俳書に度々見え、江戸と播磨に離れていても、青蘿と玄武坊はつながりをもっていた

ことが知られる。おそらく、青蘿の俳諧入門は、「十三歳の時東都の玄武坊が門に入る」ということであつたのだろう。

「青蘿居士終焉記」では、前掲の文に続いて、「其後いくその人を師とし」とある。「いくそ」は「幾そ」で多数、つまり多くの人を師にして、青蘿は俳諧に精進したという。彼は姫路藩士であつたが、藩を追われ諸国を遍歴した後、加古川に定着して俳諧師としての生活を始めた（富田志津子「栗の本青蘿年譜稿」『大阪大学医療技術短期大学部研究紀要 二二五』平成五年十二月、以下「年譜稿」）。しかし、遍歴の足取りも、加古川にたどり着くまでの俳諧活動も、ほとんどわかっていない。

この文章にあるように、複数の「師」が青蘿にいたとして、その中の一人は蝶夢であり、最も重要な「師」ではなかったか、と私は考える。彼が加古川に移り住んだ頃つまり俳諧宗匠とし

て活動し始めた頃、青蘿はもっぱら蝶夢の影響下にある。蝶夢が中心となる時雨会⁽¹⁾や墨直会⁽²⁾、さらに奉扇会⁽³⁾に出かけて俳諧に出座し、あるいは記念集『しぐれ会』『墨直し』『奉扇会』に投句⁽⁴⁾し、また前述『蛸壺塚』では、蝶夢が塚の開眼供養の導師となり、願文を書いている。

本稿では青蘿と蝶夢の師弟関係という視点から、両者の交流を追ってみたい。

一

田中道雄氏は、「文人僧蝶夢⁽⁵⁾」で「蝶夢は、自分には一人の弟子もない、と公言することがある」「通常の俳諧宗匠⁽⁶⁾と⁽⁷⁾き師弟関係をつくらなかった」とする。たしかに、「皆、蕉門」という意識から、一派を形成することはなかったかもしれない。しかし、「弟子」「門人」の定義にもよるのだが、蝶夢の教えを受け自他共に蝶夢門と認められていた者は多く、青蘿もその一人である。

青蘿が蝶夢を師とした、と考える根拠は、蝶夢から伝書を授与されていることと、五升庵の系図に門人であることが明記されていることからである。その二点については、すでに中森康

之氏と竹内千代子氏によって発表されている。

前者は、中森康之氏が、平成二十七年年度俳文学会第六十七回全国大会（於大垣市総合福祉会館）で発表した「蝶夢校『俳諧十論発蒙』二種」がそれである。この伝書は、現在二本が知られ、一つは岐阜県図書館所蔵、もう一つは俳諧叢書『俳諧註釈集 下巻』（佐々醒雪・巖谷小波校訂、大正二年刊）に翻刻された佐々醒雪旧蔵本（原本不明）である。この二本について、中森氏は詳細に考証し、明和元年と同六年に蝶夢が写した物としている⁽⁸⁾。伝書の内容や異同、蝶夢の伝書観、支考に対する評が、中森氏の発表の主論であった。

佐々醒雪旧蔵本の奥書の一部を次に掲げる。

（前略）古き書どもを校合して、私に「十論発蒙」と名して函底にひめ置くのみ。其器にあらざしては一覽をも許す可らず。後の人、心ありてみだりに伝ふる事なかれ。于時明和改元申の冬閏十二月、京極中川の院にして写す。

原本は播磨の山李、年月此書を授からん事を雪中に臂を断つてのまことあるによりて送り与へ、今新たに明和六丑の夏四月、於東山岡崎の庵にて、蝶夢書之。

（『蝶夢全集』による、傍線は富田、以下同じ）
傍線部「古き書どもを校合して、私に「十論発蒙」と名して

「函底にひめ置くのみ。其器にあらずしては一覽をも許す可らず」とあるように、蝶夢は、支考の『俳諧十論』を、蕉門の俳論書と校合し、自ら注を加えた。彼は、この書を芭蕉の俳論に自分が注した書として重く扱い、「其器にあらずしては一覽をも許す可らず」と、「函底にひめ置」いた。権威付けのための秘伝を否定した蝶夢だったが、この書はしかるべき俳人にだけ見せたい、と考えたのである。自分が認めた者以外には見せない、とするのは、秘伝の一体である。

「雪中に臂を断つ」は、自分の身を犠牲にしても誠心誠意、ということであろう。「山李、年月此書を授からん事を雪中に臂を断つのもとあるによりて送り与へ」というのは、青羅がずっと、この書の伝授を、誠心誠意をもって懇願するので、それに応えて彼に送り与えた、ということになる。蝶夢は、自ら編し秘蔵していた俳論書を、青羅に与えたのである。中森氏は、青羅を蝶夢門人と断じていないが、秘伝書を伝授された者は、門人以外の何者でもない。

授受の時は明和六年四月以前である。青羅が加古川に三眺庵を構えたのは明和初年頃と思われる、青羅と蝶夢の交流を初めて確認できるのは、明和三年の時雨会である（後述）。その後青羅は、明和六年三月十二日に蝶夢主催の墨直会に出席しており

（後述）、伝授はその頃か、と思われる。青羅は、蝶夢と初会后、三年以内に、秘伝書を授けられるほどの高弟になっていたのである。

もう一つの根拠である系図は、竹内千代子氏が、平成二十八年度俳文学会第六十八回全国大会（於日本女子大学）で発表し、その後「松岡青羅の伝書『俳諧点之格』考」（『俳文学報』五十一）平成二十九年十月）で明らかにしている。同論文中、古巣園錫馬編『五升庵道統系譜』に、蝶夢門人として青羅の名が「青羅 播磨加古川人 号山李坊」となっている。また同書で「山李坊青羅」は、落柿舎重厚や五升庵瓦全らとともに、「五升庵蝶夢上人十哲」の一人としてもあげられている。

竹内氏によれば、この系譜の著者、古巣園錫馬は古巣園三世である。古巣園初世は、同じく十哲の一人古巣園去何で、錫馬は去何と同じく近江浅井の人であった。錫馬の著した五升庵の系譜の記事は信憑性が高い。青羅は、重厚や瓦全らと同等の、蝶夢門人と評価されていたのである。

以上のことにより、青羅は蝶夢から自筆の秘伝書を与えられる高弟であり、他者もそれを認めていた、と考えられる。

青蘿の俳諧活動のうち、蝶夢と直接に顔を合わせているのは、次のような時である。

○明和三年十月十一日、粟津義仲寺の時雨会に出席、追善俳諧に蝶夢と同座する（『明和三年刊』『しぐれ会』）。

○明和五年十月、明石人丸神社に、青蘿が蛸壺塚を建立、十月十八日、蝶夢を導師に迎え、開眼供養を行う。一日千句興行、蝶夢が発句、青蘿が脇を詠む（『蛸壺塚』）。

○明和六年三月十二日、京東山双林寺の蝶夢主催の墨直会に出席、追善俳諧に同座する（『明和六年刊』『己丑墨直し』）。

○同年四月以前、蝶夢より『俳諧十論発蒙』の写本を与えられる（『俳諧十論発蒙』）。

○明和七年三月中旬、蝶夢主催の墨直会に出席、ただし門人布舟らとともに遅れて到着、後宴俳諧に同座する。布舟発句、蝶夢脇、青蘿第三（『明和七年刊』『庚寅墨直し』）。

○同年三月十五日、蝶夢が義仲寺に芭蕉堂を建立、生蓮坊で行われた芭蕉堂供養一千句俳諧に同座する（『施主名録発句集』）。

○明和八年十月十二日、蝶夢主催の時雨会に出席、追善俳諧に同座する（『明和八年刊』『しぐれ会』）。その後、門人蘿米と蝶夢

の五升庵を訪れる（『秋しぐれ』）。

○安永二年四月十二日、義仲寺の奉扇会に出席、追善俳諧に同座する。蝶夢が宗匠、青蘿が執筆（『続多日満句羅』）。

○同年七月十六日、蝶夢と京加茂川辺で、蘿米一周忌追善両吟百韻を巻く。蝶夢発句、青蘿脇（『秋しぐれ』）。

○安永八年二月二十四日、出雲へ旅する途中の蝶夢を、三眺庵に二夜泊める（『雲州紀行』）。

○天明三年十月十一日、十二日、蝶夢主催の時雨会に出席、逮夜と当日の追善俳諧に同座する（『天明三年刊』『しぐれ会』）。

○天明六年十一月一日、五升庵で木姿送別歌仙に同座する（『古巢俳諧集』筆者未見、『蝶夢全集』による）。

○天明七年四月十二日、奉扇会に出席、追善俳諧に同座する（筆者未見、『蝶夢全集』による）。

○同年四月十三日、奉扇会の帰りに、蝶夢、木姿、瓦全と石山、笠取山を経て醍醐に登る（四月十五日付、里秋宛蝶夢書簡）。

以上が、私が把握した青蘿と蝶夢の直接の交流である。これで見ると、その初会は、明和三年の時雨会である。加古川に住む前の青蘿の活動は不明なのだが、両者の接点はこれ以前には考えにくい。蝶夢側の史料にも青蘿は現れてこないのである。

明和三年十月十一日、青蘿は義仲寺幻住庵の時雨会に出席し、

五峰発句の追善俳諧で蝶夢と同座した。蝶夢は二十二句目、青蘿は九句目を詠んでいる。

この時の時雨会は、常陸の三日坊五峰を迎え、行脚を終えて故郷に帰る五峰が施主となる形をとっている。五峰は中島氏、常陸の額田村の人で、四十八歳で全国行脚の旅に出て、松島象潟を歴訪したという（『額田町史』）。この時雨会は五峰の主催といっても、彼はあくまでも客人であり、実際は、文素と蝶夢が取り仕切ったのであろう。この時刊行された『しぐれ会』の蝶夢序文を次にあげる。

（前略）こゝにひたちなる三日坊のぬしは、たゞ煙霞の痼疾にその身をわすれ、しばし風雅のさびしみを得て、やぶれ笠を権貴の門にぬがず、菜雑炊のむしろに俳諧のおかしみを味ひて、松しま、象潟の春に遊び、須磨・はし立の秋を詠て、ことし東の故郷に帰らんとするの道、あは津の寺にまふでける。その日しも祖師の祥忌の連夜なればとて、とみに一座の法筵をもふけて、とし月、蕉門の風雅をうりて東西に遊行せし、その祖恩を謝し奉らんといえる、施主のこゝろざしのあらましを、義仲寺の廟前にして

京極中川の法師 蝶夢書

『時雨會集成』濁点、傍線は富田、以下同じ

傍線部から、五峰は、東北を行脚した後、天の橋立、須磨を経て義仲寺に至り、これから常陸に帰るといことがわかる。また同書文素の跋文に

（前略）此坊や北越・西海の行脚にやつれながら、鼻祖の高徳をしたひ、はりまがた鹿兒川のほとりより、こゝの湖南の時雨会をかぞへ、先幻住庵に來り、法筵を開かれけるに、都鄙の好士入つどひて庵にあふれ、庭にみり。まことに其志の厚きを感じて、粟津の農父筆を添へ待るものか。

浮巢庵

とある。「はりまがた鹿兒川のほとりより、こゝの湖南の時雨会をかぞへ」と、五峰は加古川を経て義仲寺へやってきたのである。田中道雄氏は、「山里は、それまで鹿兒川に滞在した三日坊五峰に同行したか」（前掲「時雨会と『しぐれ会』」）とする。筆者も首肯するところである。田中氏は、幻住庵に入っていた無外庵既白が、その幻住庵で行われた時雨会に五峰・山里の出席を導いた、と推定している。たしかに、既白が前年に刊行した『蕉門むかし語』には五峰が巻軸近くに入集しており、知遇であることを思わせる。

五峰と既白に関しては田中氏の説を肯定するとして、五峰がなぜ加古川に滞在したのか、青蘿と旧知であったのか、という

疑問が残る。また青蘿が、五峰と共に義仲寺まで足を運んだのは、どのような経緯があったのだろうか。

江戸で玄武坊門にあつて俳諧を学んだという青蘿は、若い頃に常陸の五峰と面識があつたのかもしれない。あるいは、加古川定着以前の青蘿は、加賀の關吏を訪ねており、同じく北陸を行脚した五峰とは、關吏を通して知るところとなつた可能性もある。いずれにしてもすべて推測の域を出ない。しかし、五峰がわざわざ加古川へ寄つたのは、そこに庵を構えた青蘿を訪うためであり、その後二人は、共に時雨会に参加するために、義仲寺まで同道した、というのは事実であろう。そしてそれこそ、時雨会に全国から俳人を集め、蕉門俳壇の統一を目指していた蝶夢のぞむところであつたといえる。

義仲寺において、二人は、蝶夢と会した。五峰は時雨会の施主となり、青蘿は蝶夢を師と仰ぐようになる。

常陸に帰つた五峰は、その後、時雨会に名を見出すことはないが、青蘿はしばしば参加している。義仲寺まで赴いての俳諧出座は三回、『しぐれ会』への投句は四回、最後の投句は寛政元年で、寛政三年に亡くなる頃まで、何らかの形で時雨会に関わり続けていたのである。

また、蝶夢は東山双林寺の墨直会も明和二年から同七年まで

主催している。青蘿は、律儀にこちらにも参加し、出席は二回、投句は一回。さらに義仲寺の奉扇会も同様で、出席二回、投句は一回であつた。

三

明和五年夏、青蘿は明石人丸神社に芭蕉句碑を築く。「蛸壺やはかなき夢を夏の月」の句を埋めたので「蛸壺塚」という。

芭蕉塚の建立は、「芭蕉長逝直後から始まり、蕉風俳諧の流布に伴つて累増し、幕末には一〇〇〇墓に迫つた思われる」(『俳文学大辞典』中、田中道雄「芭蕉塚」というもので、義仲寺の編になる『諸国翁墳記』には最終的には四二二墓が記載されている(田坂英俊著『諸国翁墳記』―翻刻と検討―)平成二十六年刊、参照)。その推進に重要な役割を果たしたのが蝶夢であることは、広く知られている。

同年十月十八日、青蘿は蛸壺塚の開眼供養の法会をとり行い、その導師として蝶夢を招いた。また、一日千句の追善俳諧も催している。蝶夢は、「願文」を認め(『蛸壺塚』所収)、一日千句の巻頭発句も詠んだ。

武士の身分を剥奪され、寄る辺のなかつた青蘿は、この時加

古川に庵を構えてまだ三年余りであった。塚建立の事業は、蝶夢と俳諧の方向をともにしたからこそ、成し遂げられたのではないか。『蛸壺塚』五百枝の序文に、

その塚の供養の式あるべしとて、遠く京極中川の蝶夢法師をむかへ侍れば、国中の社中聞伝へ……此社につどひあつまり

とあり、蝶夢の来播は、開眼供養への門人の参加をうながしたことを伝えている、おそらく一門の拡大にもつながったはずである。『蛸壺塚』には、青蘿を生涯ささえることになる播磨の俳人達の多くがすでに名前をつらねている。高砂の酒造家布舟や、林田の大庄屋兩人とその弟蘿来らである。加古川に俳壇を形成しはじめた青蘿にとり、蝶夢を師とし、蕉風復興運動の流^①れに乗ることは、門人を集めその信頼を得るためにも大切なことだったのである。

同書所収の一日千句の巻頭は、蝶夢発句で青蘿脇である。

明和五戊子年十月十八日於人麿社月照寺興行

巻頭

月高し塚は木の葉の山になる迄

蝶夢

汐風さむくかきあわす袖

山李

蝶夢の発句は、芭蕉が「蛸壺やはかなき夢を夏の月」と詠ん

だその月は、今、冬の月となつてこの塚を照らす。やがて、木の葉が降つて塚を埋め尽くすだろう、というもの。青蘿の脇は、明石の海の汐風で応じ、冬の明石は、風が寒いことです、ご苦勞様、と師を勞う。

蝶夢の句は、一日千句中こだけであり、俳諧に同座はしていない。しかし京の僧で、蕉風復興運動の中心人物が、播磨に来てくれた、そのことは、青蘿とその門人たちにとって大きな意味があつたにちがいない。同集の巻末にも蝶夢の発句を置いており、つまり『蛸壺塚』は巻頭巻末に蝶夢を据える。蝶夢が重要な存在であつたことがわかる。

また、同書「諸国名録」の部の巻頭の発句は鳥酔、中には玄武坊の句もある。三日坊（五峰）も句を寄せており、最後は蝶夢で終わる。玄武坊門人門から、関東の俳人との関わりを経て、蝶夢にたどりついた青蘿の俳歴がうかがわれる。

青蘿晩年の寛政元年、青蘿の後継者となる玉屑が、淡路松帆の浦に「扇塚」を建立した。開眼供養は四月十二日で、青蘿は淡路願海寺まで出かけて、開眼の俳諧の発句を詠んでいる。さらに、記念集『うらあふぎ』（玉屑編、寛政元年序）の序文を書いており、それによると

ひと、せ義仲寺の奉扇会に翁の像にもたせ奉りし扇を、

洛の蝶夢幻阿弥陀仏がおのれにあたへける。こを又、爰に納む。浦の景色により、扇のこゝろもむなしからぬほ句を碑にしるさんには

ひらくとあぐる扇や雲の峰

とある。青蘿が、蝶夢から譲り受けた奉扇会の扇がそこに埋められ、塚には「ひらくと」の芭蕉句が彫られたのであった。この時、蝶夢は開眼供養に招かれていないが、やはり、芭蕉句碑建立の発端となっていたのである。扇塚は蛸壺塚とともに、『諸国翁墳記』に記載されている。

四

明和年間は、蝶夢と青蘿の交流の最も頻繁な時期である。蛸壺塚建立の翌年、明和六年三月十二日、青蘿は門人四人を同道して上京、蝶夢主催の墨直会に出席し、追善俳諧にも連なっている。門人は、薪水、蘿来、普山、虫臂であった。このときの『己丑墨直し』の「一座捻香」の巻頭は、青蘿とその門人が並んでおり、蝶夢が加古川から上京した青蘿らを歓迎しあつく遇したことがわかる。

この上京の折、青蘿は、蝶夢に『俳諧十論発蒙』を与えられ

たか、と推察される。前述のように、同書の奥書に、「原本は播磨の山李、年月此書を授からん事を雪中に臂を断つまことあるによりて送り与へ、今新たに明和六丑の夏四月、於東山岡崎の庵にて、蝶夢書之」とある。与えた時期とあらたに書写した時期に隔たりがないとすれば、このときに授与された可能性が高い。伝書の授与は、蝶夢が、青蘿の人間とその俳諧を認めたと証しとなる。

その翌年、明和七年三月の墨直会にも、青蘿は門人布舟らと出かけた。しかし船が遅れて追善俳諧に間に合わず、後宴俳諧を催し、蝶夢も同座している（『庚寅墨直し』）。その後青蘿らは京にのこり、蝶夢が義仲寺に芭蕉堂を建立して、三月十五日に生蓮坊で催した芭蕉堂供養に出席している。その記念集『施主録発句集』（蝶夢編）では、青蘿の次のような発句が下巻巻頭を飾る。

子規なくや矢をつく雨の中

鹿見川 山李坊

篠突く雨の中で鳴き立てる子規を詠む。鋭い音の重なりをとらえており、青蘿の自信作であったのだろう。また、巻末にある一千句の巻頭百韻に出席している。蝶夢は発句を詠み、青蘿は三十五句目を付ける。青蘿の門人らの名も見える。

そのまた翌年、明和八年の蝶夢主催の時雨会に、青蘿は門人

蘿来とともに参加した。

蘿来は、播磨林田の大庄屋三木家の当主兩人の弟である。竜野に住み、古俳人の短冊を多く所持し、また諸国の俳人と交流をもつ風流人で、兄の兩人とともに、青蘿の高弟であった。

この時の『しぐれ会』『出席捻香』の発句は、青蘿が巻頭、つづいて蘿来で、蝶夢が巻末を詠む。次のようなものである。

のこりなく湖水をめぐるしぐれ哉

播磨 山李

桐の葉のまづ枯にけり初しぐれ

蘿来

(中略)

時雨会やぬれて参るは誰くぞ

蝶夢

(『時雨會集成』)

この時雨会に参加した後、青蘿と蘿来は、蝶夢の五升庵に泊まっている。その風景は次のようなものであった。

いづれの年の冬ならん、東山の五升庵へ蘿来・山李尋来りて、一夜やどり、囲炉裡に柴折くべて物語るに、山李がにくさげに肥ふとりたる足を横たふれば、蘿来はなやみがちにかよはき細すねをさし出してあたる。や、夜ふけ、窓うつ時雨の音に、腹の寒くなりぬるぞ、粥焚てあたえよといひしも、いつかむかし語に、そのぬしはなき人の数に入りて、此一冊に吟魂をとむるもはかなし(後略)

(『秋しぐれ』蝶夢跋、俳書文庫2所収)

囲炉裡を囲む蝶夢と青蘿と蘿来の姿は、ほのぼのと温かい。青蘿(山李)は肥太り、蘿来は病弱で痩せていた。蝶夢は二人のために粥を煮たのであった。

翌年、明和九年七月十六日に蘿来は没した。三十歳に満たなかつたという。蝶夢は、その追善集『秋しぐれ』(兩人編、安永二年刊か)に追悼句を送り跋文を寄せた。追悼句は

送り火やわけて悲しき影ひとり

洛 蝶夢

というものである。訃報に接したときの吟であろう。死者を送る送り火は悲しいが、その日に逝った人のことは、とりわけ悲しい。五升庵で、青蘿と蘿来の三人で過ごした思い出があるだけに、蝶夢の蘿来を悼む気持ちはいっそう強かつたのかもしれない。

安永二年四月十二日、青蘿は奉扇会に出席した。この時は、鳴海の蝶羅が施主となって発句を詠み、蝶夢が宗匠で、青蘿がその執筆をしている(『続多日満句羅』名古屋叢書文学編2所収)。

そしてその年の七月十六日、青蘿は、蘿来の一周忌ということで、蝶夢を訪れ、京加茂川辺において二人で一周忌追善両吟歌仙を巻いている。蝶夢の詞書と発句、青蘿の脇句は次

のとおり。

七月十六日は蘿来のぬしが小祥忌とて、山李

坊と、もに加茂川の辺りに出て、なき人に川

水を手向るとて、去年の秋、送り火や中に悲

しき影ひとり、と歎きたりし事など語出て

ひと、せの立や麻木の煙るうち 蝶夢

逝ものは唯水の月かけ 山李坊

〔秋しぐれ〕

発句の麻木は「おがら」のことで、盂蘭盆会の送り火を焚くのに用いる。昨年を送り火の折に逝った蘿来を、今年の送り火で送る。過ぎた時間を、蝶夢はしみじみと思う。麻木の燃えるうちに、ひととせが過ぎてしまった気がする、という。青蘿の脇匂は水に映る月に、逝った者を重ねる。実体がありそうで、そこにはないものである。

若くして亡くなった青蘿の門人を、蝶夢と青蘿はともに悼んでいる。両者の交流は、門人もふくめてのものであった。

それから六年後、安永八年二月下旬、蝶夢は、出雲へ旅する途次に青蘿を訪れた。そのときのことを、以下のように認めている。

廿四日、人磨の社にまうづ。此所にて蕉翁の塚供養の千句

興行ありしも、二むかしもや。午時ばかりに加古の渡の山李がかくれ家につくに、年ごろのなつかしさいひ出して物語るに、そこらしれる人の多く来りて、「行さきはるけき道の程なり。足に灸すへよ。杖の竹きりて」といたはれば、二日はかりこの三眺庵にやどる。

〔雲州紀行〕『蝶夢全集』所収

青蘿の三眺庵に旅荷を解くと、青蘿の門人たちがたくさん訪ねてくる。長旅を労ってくれ、灸をすえてくれる者、杖の竹を伐つて来てくれる者、いろいろである。蝶夢はその居心地の良さに甘えて二日間逗留したのであった。ここでも、青蘿だけでなく、青蘿一門と親しく交わる蝶夢の姿が浮かび上がる。

蝶夢の青蘿訪問はこの時だけではない。年代は不明だが、蝶夢の次のような発句がある。

播磨の山李房が庵にありて別れにのぞむ

朝風にはなれかねたる火燧かな

『草根発句集酒竹甲本』『蝶夢全集』所収

冬の句である。朝、青蘿の庵を辞して出発しようとするが、火燧の温かさに離れられないでいる。火燧のぬくもりはまた、友人のぬくもりでもある。青蘿と蝶夢は、京と播磨を行き来し、温かい気持ちを通わせる師弟であり、友人であった。

五

天明期になっても、蝶夢と青蘿の交流は続く。天明三年の時雨会で蝶夢は義仲寺への奉仕を今後辞することを宣言した。実際、時雨会の施主は、この年を限りに引退している。青蘿は、この時、門人布舟を伴って参加し、連夜と当日の追善俳諧、さらに後宴俳諧まで蝶夢と同座している。蝶夢の引退を惜しむ気持ちがあつたのであろう。

その後、天明六年十一月一日、五升庵で蝶夢門人の木姿送別歌仙が巻かれ、青蘿は門人布舟と共に出席、蝶夢と同座している（『古巢俳諧集』筆者未見、『蝶夢全集』による）。

また、天明期の奉扇会にも、青蘿は参加しており、天明五年『奉扇会』に投句、同七年四月十二日には布舟を伴って義仲寺まで出かけ、蝶夢と追善俳諧に同座している。（筆者未見、『蝶夢全集』による）。そしてその翌日、天明七年四月十三日に、青蘿は、蝶夢、瓦全、木姿と、石山、笠取山を経て、醍醐に登った。蝶夢は、里秋（歩簫）宛書簡で次のように知らせている。

一昨日は粟津奉扇会の帰りに、石山より笠取山を歴て醍醐に登り申候処、折からの子規に心をすまし申候。同道の輩句あり

里の名や笠取あへず郭公

雨はれや笠取山のほととぎす

子規石山いで、笠とりや

杜宇青梅おちる拍子哉

（高木蒼梧著『義仲寺と蝶夢』昭和四十七年刊 所収）

瓦全も木姿も、蝶夢門の重要な門人である。青蘿もその二人と同等であつた。蝶夢とその門人三人が連れ立って山歩きをし、皆で時鳥に耳を傾けて発句を詠んだのであつた。蝶夢の句は、時鳥の鳴き声を拍子に、ぼたりぼたりと落ちる青梅を詠む。音を詠んだ句である。他の三人の句は、笠取山の地名を詠み込んでいる。青蘿の句は、雨が止んで笠を取るか取らぬかのうちに、もう時鳥が鳴いた、と一声を聴いたうれしさを詠んでいる。

しかし、これを最後に、青蘿と蝶夢の交流の記録は確認できない。青蘿の活動の方向がちがってくるのである。青蘿はこの時（天明七年夏）、几童、月溪、五来、臥央、晧台、闌更とそれぞれ両吟歌仙を巻き、『都六歌仙』（天明七年序）として刊行した。当然、几童、晧台、闌更周辺の人々との交流が盛んになる。几童も闌更も晧台もこの頃京に居り、それらの俳人と交流を持った青蘿は、蝶夢と離れていくことになるのである。

寛政元年に青蘿は『しぐれ会』に投句した。この時、門人の

播磨 青蘿

但馬 木姿

京 瓦全

野子

うち玉屑が義仲寺まで出かけて、時雨会の追善俳諧に蝶夢と同居し、青蘿は十人近い門人とともに発句を投句している。しかし、蝶夢との間接的な交流もそれが最後であった。

寛政二年、青蘿は暁台、闌更とともに二条家俳諧を創始する（富田志津子編『二条家俳諧』平成十一年刊 参照）。同年九月と十月に、三人それぞれが宗匠となつて、二条家俳諧を執り行っている。しかし、蝶夢は二条家俳諧に批判的であつた（前掲、竹内千代子氏）。

もともと芭蕉百回忌を前提として始められた二条家俳諧であつたが、蝶夢は、義仲寺の芭蕉百回忌と二条家俳諧が結びつくことを、よしとしなかつた。しかし、蝶夢の意向に関わらず、両者は合体し、寛政五年、二条家は芭蕉に「正風宗師」を追号し、義仲寺住職の重厚が二条家俳諧宗匠の免許を受けて芭蕉百回忌の百韻は行われた（重厚編『祖翁百回忌』寛政六年刊）。そのとき蝶夢は「野子は数日の心遣に午後逃帰申候。是は不思議の事に候。向後は木曾寺の儀は不致世話候」（寛政五年四月二十八日付、歩簫宛蝶夢書簡、『義仲寺と蝶夢』所収）という状態であつた。蝶夢は栄えある俳諧に参加せず、二条家俳諧の介入をゆるした義仲寺に対して怒り、もう義仲寺の世話はしない、とまで言っている。二条家俳諧は蝶夢の意に反したもので

あり、二条家俳諧の創始に奔つた青蘿は、そのとき蝶夢と袂を分かつたのであつた。

先に亡くなつたのは、青蘿である。寛政三年六月十七日に没した。追善集『水の月』には、蝶夢の追悼句はない。暁台、闌更のほか、二条家俳諧の役人が名を連ねる。蝶夢は、追悼句を送らなかつた。しかし、その中陰頃、次のような句を詠んでいる。

播磨の青蘿が中陰もや、みつる比

数ゆるもはかなき秋の日数かな

（『草根発句集酒竹乙本』『蝶夢全集』による）
いったん袂を分かつた弟子ではあつたが、青蘿に対する温かい思いは、まだ持っていたのではなかつただろうか。

おわりに

蝶夢は享保十七年生まれ、青蘿は元文五年生まれで、年齢は青蘿が八歳若い。師弟というほどの年齢差ではなかつた。しかし、加古川に庵を構えた頃の青蘿は、とりわけ蝶夢の影響下にある。明和三年に五峰とともに時雨会に参加した青蘿は、その時、蝶夢門に入った、と考えてよいだろう。そして青蘿は、毎年のように、時雨会や墨直会、奉扇会に参加する。塚の建立に

際しては蝶夢を導師と頼む。また、青蘿の句が入集する俳書の多くが、蝶夢系であった。これに秘伝書の授受があり、五升庵の系図に名が連なれば、青蘿が蝶夢の重要な門人であったという事実は動かかないだろう。

蝶夢のおかげで、青蘿の門には、芭蕉を慕い蕉門に連なりたい人々が集まった。そして、芭蕉追善に奉仕したい人が、青蘿に連れられて、時雨会等の儀式に参加し、記念集に入集する。自分たちの地方にも芭蕉塚を建立する。それは、そのまま蝶夢の目指した蕉風復興運動であった。

青蘿と蝶夢の交流は、結果的には、蝶夢の運動の一環であり、また青蘿の俳壇経営であった、といえるのかもしれない。しかし、両者の詠んだ句や書いた文章を見ると、そうした野心とは別の、温かい交わりが感じられる。お互いに人間として惹かれ認め合っていた。だからこそ、目指すものが違ったときに、袂を分かったのかも知れない。

青蘿というと、中興俳諧の名家として、たとえば『蕉門中興六家集』（菊全其成編、寛政八年刊）では蕪村、暁台らとともに六人のうちにあげられている。しかし、青蘿がそうした中興名家と対等な俳諧活動をするのは、晩年であり、青蘿の俳諧人生の多くは、蝶夢の運動の一翼をになったものであったのである。

【注】

- (1) 蝶夢が、義仲寺の時雨会を中心として全国俳壇の蕉門化を目指したことは、田中道雄「時雨会と『しぐれ会』」（義仲寺編『時雨會集成』平成五年刊）に詳しい。明和五年から天明三年まで時雨会の施主を務め、その前後も関わっている。
- (2) 東山双林寺の墨直会は明和二年から同七年まで蝶夢が主催している。田中道雄「翻刻・蝶夢編『墨直し』六種」（『佐賀大学教養部研究紀要 二十八』平成八年三月）。
- (3) 義仲寺で四月十二日に行われ、蝶夢も関わっていた。
- (4) 記念集『しぐれ会』『墨直し』『奉扇会』の表記は、田中道雄氏にならう。青蘿の投句は、『しぐれ会』明和五年、同八年、安永二年、天明五年、同七年、寛政元年。『墨直し』明和五年。『奉扇会』天明五年。
- (5) 『蝶夢全集』（田中道雄・田坂英俊・中森康之編、平成二十五年刊）所収。
- (6) 明和元年に蝶夢が『俳諧十論』講義録を春渚から借り注を加えて『俳諧十論発蒙』とし、奥書を記した。さらに明和六年、蝶夢は同書を再び写している。また、中森氏によれば、蝶夢は、秘伝書を頒発する支考を「ゑせ法師」と見下していた。しかし、俳論面では支考の考えを肯定し、受け継いでいる。『俳

「諧十論」を芭蕉の教えとして受け入れ、それに注を加えたのが二つの『俳諧十論発蒙』である。

(7) これは、『蝶夢和尚文集』に「頭陀の時雨序」として蝶夢の序文が載るので『頭陀の時雨』という書名であったと思われる(『蝶夢全集』による)。

(8) 「年譜稿」による。闍更編『花の故事』に青蘿が入集する。

(9) 『額田町史』によると、その後、額田町に芭蕉句碑を建立し、多くの門人をのこした。

(10) 前掲「時雨会と『しぐれ会』」によると、義仲寺の芭蕉塚を本墓として諸国に築かれた芭蕉塚は、全国俳壇ネットワークを形成するものであった。つまり、芭蕉塚の建立も、蝶夢の運動の一環であった。

(11) 「蕉風復興運動」という表現は、『俳文学大辞典』に従った。田中道雄氏の提唱による。

【付記】本論は、『蝶夢全集』『時雨會集成』に拠るところが大きい。また、中森康之氏、竹内千代子氏から、多くのご教示を受けた。記してお礼申し上げたい。

(とみた しづこ) 姫路獨協大学教授